

春がやってきた。蒜山高原の斜面が燃えている。しかし、慌てる必要はない。これは、深刻な山火事ではない。草原の生物多様性や地元の生活様式を維持するため、野焼きが行われているのだ。

半自然草地は、人と自然が相互に利益を与えながら両立する生態系である。草刈りや家畜の放牧などの人間の活動は、草原が元の森林に戻るのを防止し、草原の動植物に適した生物圏が維持される。世界的には、家畜の飼育に天然の放牧地が使われなくなり、以前の牧草地が耕作向きの農地に変容するにつれて、半自然草地の量は減少している。草原は現在、日本の陸地面積のおよそ1パーセントを構成する。これは、1960年のわずか3分の1である。草原の保全は大いに重要性を増していると言える。

蒜山では、地元の野焼きの慣習（山焼き）により、半自然草地が維持され、現在も、キキョウ（桔梗）やサクラソウ（桜草）などの種（ともに野生環境において危機に瀕している）を見ることができる。このような、人による管理の下、春の雪解けの直後に実施される弱い火入れでは、地表下の温度は山火事と比較して高温にならない。結果として、草原の植物の根や種子が死滅することはない。根や種子は、光を遮断する下生えの植物や若木が除去された環境で、すぐに息を吹き返す。また、黒くなった地面はより多くの日光を吸収することで、土壌の温度を発芽に有利な温度にまで上昇させ、生育期間の長期化を可能にする。

野焼きの伝統は、蒜山の生活に深く関係している。過去には、この草原は馬や牛の放牧地の役割を果たし、ここで収穫した草は、屋根ふきの材料や、待望の農業用肥料となった。草は、雪囲い（葺き草を織り合わせて作る、住居を積雪の重みから守るための木製囲い（防雪柵））を作るためにも使用された。蒜山の草原は地域社会の共有資源として管理されたので、地元の人々が毎年春に集まり、一丸となって、維持・管理を行った。この慣行はもはや、住民の生活に必須のものではなくなったが、貴重な伝統を維持すると同時に、壊れやすい、ユニークな生態系を保全すべく、現在も地元のボランティアが集まり、野焼きを行っている。山焼きは通常、天候を考慮しながら、3月下旬あるいは4月初旬に実施される。観光客は、蒜山の文化の重要な一部であるこの行事に参加したいと思えば、いつでも参加することができる。